

コロナ禍による妊娠・出産・育児への影響の現状 —インタビューによる予備調査—

Influence of COVID-19 pandemic on pregnancy, birth, and childcare :
A preliminary investigation through an interview

加茂尚子¹⁾, 杉野真紀¹⁾, 正司亜矢子¹⁾, 古賀聖典¹⁾, 寺尾友希¹⁾, 松浦和文¹⁾,
中村文哉²⁾, 徳田和央²⁾, 吉村耕一²⁾, 田中マキ子²⁾

Naoko Kamo¹⁾, Maki Sugino¹⁾, Ayako Syoji¹⁾, Toshinori Koga¹⁾, Yuki Terao¹⁾, Kazufumi Matsuura¹⁾,
Bunya Nakamura²⁾, Kazuhiro Tokuda²⁾, Koichi Yoshimura²⁾, Makiko Tanaka²⁾

- 1) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士後期課程
- 2) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科

- 1) Doctoral Program, Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University
- 2) Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

要約

本研究では、コロナ禍により影響を受けた妊娠・出産・育児の現状を明らかにするための予備調査を行うことを目的として、半構造化面接法を用いて調査を実施した。コロナ禍以前とコロナ禍での妊娠・出産・育児経験者としていた経産婦5名の語りに、テキストマイニング分析を行い以下のことがわかった。

1. 対象者が語るコロナ禍の影響は、調査項目「協力関係」「欲しいサポート」「出産」に示された。
2. 「協力関係」では協力を依頼したいけれど依頼しづらいというアンビバレントな実態がある。
3. 「欲しいサポート」では、三密回避や感染対策など、子ども連れの生活や行動では、種々の調整が必要とされるため、全般的なサポートを要求する。
4. 「出産」では、家族にとってのイベントの共有欲求の障害と妊婦としての出産に対する意識の高揚に影響する。

キーワード：コロナ禍, 妊娠, 出産, 育児, テキストマイニング

Abstract

We preliminarily surveyed the influence of COVID-19 on pregnancy, birth, and childcare. We used semi-structured interviews. We used text mining to analyze five participants who experienced pregnancy and childbirth before and during the COVID-19 pandemic. This study showed the following outcomes: (1) COVID-19 influenced familial support, social support, and birth. (2) Participants found it difficult to ask for support. (3) Participants needed social support for infection prevention at the preparation stage because they also cared for their children. (4) The birth affected the failure to share needs of the family and enhance the awareness of childbirth as a pregnant woman.

Key words : COVID-19, pregnancy, birth, childcare, text mining

I はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大は、これまでと異なる生活様式が求められるなど、私たちの日常生活を大きく変化させた。2020年4月には全国に緊急事態宣言が発令され、休業要請や休校要請、外出制限などをうけて様々な対象が影響を受けた。

妊娠・出産・育児期にある女性は、自身の身体のことだけでなく、胎児への影響も心配しながら妊娠期を過ごし、出産を迎え、その後の育児を行っており、新型コロナウイルス感染症の影響を受けていると推察される。松島みどり¹⁾らが全ての都道府県で緊急事態宣言が解除された直後に行った、3073名の産後12ヶ月未満の女性を対象とした調査によると、平均して3分の1以上の女性が、コロナ禍で両親学級などの中止、出産入院中の面会不可、公的保育サービスを受けられなくなった、配偶者の在宅勤務によって生活が変化したといったことを経験していた。この調査からも、妊婦は、妊娠・分娩・育児に関する知識の獲得と不安の解消、社会的ネットワークの形成を目的としている母親学級や両親学級²⁾などを受講できておらず、また、夫以外の両親や祖母などの援助が受けられる里帰り出産を行っていない状況であると推測できる。これらのサポートが受けられない状況で妊娠・出産・育児を経験する女性とその家族は、さまざまな問題や困難を生じているのではないかと考える。しかし、その現状は十分把握できているとは言えない。そこで、コロナ禍による妊娠・出産・育児への影響の現状の概観が明らかになれば、さらなる現状調査のための基盤的知見になるとともに、課題解決の検討に繋げることができる。

II 目的

本研究では、コロナ禍により影響を受けた妊娠・出産・育児の現状を明らかにするための予備調査を行うことを目的とした。

III 研究方法

1. 対象者と調査方法

コロナ禍の時期（2020年2月～2021年8月までの間）に妊娠、出産、育児を経験し、コロナ禍の前（2020年2月まで）に上の子どもを出産し育児経験を持つ経産婦を対象候補とし、機縁法により募集した対象候補者に同意説明文書および研究参加同意書を送付して、同意が得られた人を対象とすることとした。調査は2021年9月1日～2021年9月29日に実施した。

オンラインミーティングツール Zoomを使用し、イ

ンタビューガイドを用いた半構造化面接法においてデータを収集した。インタビューの時間は、1人につき30分から60分までとし、参加者の同意を得てインタビュー内容を録音（録画はしない）、得られた録音記録から逐語録を作成した。

2. 調査項目

調査項目は、以下の6項目である。

- ①属性：年齢、仕事の有無、出産回数、同居者の有無、里帰り出産の有無、前回出産の時期
- ②妊娠に関して、コロナ禍により影響を受けたこと
- ③出産に関して、コロナ禍により影響を受けたこと
- ④育児に関して、コロナ禍により影響を受けたこと
- ⑤身内（パートナー、同居家族あるいは里帰り先）との協力関係に関して、コロナ禍により影響を受けたこと
- ⑥コロナ禍での妊娠・出産・育児を経験してあったらよかったと感じたサポート

3. 分析方法

インタビューの録音内容を逐語録に書き起こした。次に、逐語録からCSVファイルを作成し、KH Coder Ver.3を使用してテキストマイニングを行った。5名の対象者の語りについて、各対象者と調査項目②～⑥の語りについて「対応分析」を行った。

4. 倫理的配慮

調査対象者には、研究目的、調査協力は任意であること、個人情報の保護等について、得られたデータは本研究以外に使用しないこと等を、同意説明文書及び口頭で説明した。研究参加同意書への署名により同意の確認をした。本研究は、山口県立大学生命倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2021-16）。なお、本研究に関連して開示すべき利益相反はない。

IV 結果

1. 対象者の基本属性

本研究は、コロナ禍による妊娠・出産・育児への影響の現状を検討したため、対象者5人はコロナ禍以前とコロナ禍での妊娠・出産・育児経験者とし、対象者抽出を行った。対象者は、2020年5月～2021年3月の間にコロナ禍の出産を経験した経産婦5名であった。全員30歳代であり、職業を有するもの3名と無職2名であった。出産回数は、2回が2名と3回が3名であった。全員が夫と子供2～3人と同居していた。全

員が夫のサポートを有しており、その他のサポートとして実母が3人、実家の両親の回答が1名、友人の回答が1名であった。里帰り有りは2名で、里帰り無しが3名であった(表1)。

2.各対象者の語りと調査項目との対応

対象者5名に行った半構造化インタビューの逐語録のデータを作成した。その後、語りの内容の前処理として形態素分析を行った。結果、総抽出語数は12800語であり、使われた単語の種類は1022種類。インタビューに出現した単語の頻度を検討し、出現頻度2回以上の語とした。抽出した品詞は、名詞・形容詞・動詞など全てとし、対象者の語りの基本情報は表2となった。総抽出語が1466~3329と対象者ごとに差が生じたが、コロナ禍での妊娠・出産・育児にどのような事が影響するかを検討するため、そのままを採用し検討に用いた。実家で出産に臨めたのはB氏とD氏であったが、語りは対照的で、総抽出語数が一番少ないB氏、逆に一番多いD氏となった。語りの多い・少ないはあるが、各対象者の語りと各調査項目について対応分析を行った(図1参照)。

結果、調査項目⑤身内(パートナー、同居家族あるいは里帰り先)との協力関係に関してコロナ禍により影響を受けたこと(以下「協力関係」と記す)、調査項目⑥コロナ禍での妊娠・出産・育児を経験してあったらよかったと感じたサポート(以下「欲しいサポート」と記す)、調査項目③出産に関して、コロナ禍により影響を受けたこと(以下「出産」と記す)について、特徴が示された。「協力関係」では、父・休暇・勤務・友達が近づき、「欲しいサポート」では、オンライン・手続き・紙が近くに位置している。「出産」では、立ち会う・面会・実感が近づき特徴を示した。また、各調査項目に対する対象者の語りをキーワード毎にコンコーダンスで確認し、「主な語り」として表3にまとめた。感染への対応から、親子関係・友達関係、場が制限、限定されることによる、困り事やストレスが語られている。

V 考察

本研究では、コロナ禍により影響を受けた妊娠・出産・育児の現状を明らかにするために5名の対象者の語りから検討した。結果、テキストマイニングによる対応分析から、3つの特徴が示された。以下、各特徴について考察する。

1. 「協力関係」について

「協力関係」では、父・休暇・勤務・友達・在宅・兄弟・状況の名詞が近づきあっている。育児休暇をとり手伝う対象者の夫、また、非常事態宣言下では、外出頻度を少なくするや、在宅勤務も多く、一家族単位で過ごす時間が多くなっている。そのため、家事全般への夫の参加もあり「助けてもらう」という語りで示されている。しかしながら、「県外の両親も来づらい」「同市内でも両親と行き来しづらい」など遠慮のない親においてさえ家に来てもらうこともままならない状況の語りや、「家族が顔を合わせるが多くなりストレスfulになった」との語りもあり、家族時間が増えたことの良さや課題が示されている。

このことは、コロナ感染への対応のため近い関係にあっても、協力を依頼したくても容易に助けを依頼しづらい状況、新しい家族を迎える準備のための協力など、協力関係に関するアンビバレントな実態が示されたと考える。また、家族単位以外の協力関係においては、保育園の休園や公園や支援センターへ行くことを控えることにより、母親同士の協力関係が行えていないことも「同世代の母親には公園に行った時に会うことができた」からも推察される。

2. 「欲しいサポート」について

「欲しいサポート」では、兄弟の面倒を見てもらえる場や、種々の手続きの簡便さについての語りが固まりをなしていた。三密回避や感染対策行動などから、コロナ禍では子ども連れの外出は気を使うことが多くなる。また感染を受けるという危険性も避ける必要があるため、対面での対応を極力避けたいとする思いからと理解できる。しかし健診等は、当事者の身体状況を確認する必要があるため、文書やメールなどで済ますことができず、出かけるという行動が必要となる。子どもを連れて出かけるや、診察に入れない子どもをどこに残して診察を受けるのかなど、様々な状況を考慮し、「調整をする」必要が生じるため、一般的なサポートを望んでいると考察できる。しかし、「感染予防のため、家族以外からの新しいつながりを求めない」という語りにあるように、サポートを望んでも、感染の危険性から他人との接触を避けて、サポートを受けることを控える対象者もいた。感染コントロールを基本とし様々なサポートが繋がっていかなくてはならないと考えるが、妊娠・出産・育児といった変化過程に沿うサポートには、不足があると考えられる。

3. 「出産」について

「出産」については、「立ち会う」の語りが注目された。「出産という人生で一番感動することを一緒に共有したかった」との語りから、立ち会い分娩ができなかったことへの影響が大きいと理解できる。立ち会い分娩に関する研究では、夫が立ち会うことの効果について多くの研究がなされている。1990年から2001年までの間の「夫立ち会い分娩」に関する研究動向では、夫立ち会い分娩の経験の有無と家事・育児参加に対する夫の態度変容には差がなかったと報告されている³⁾。また、夫の立ち会い分娩に参加した効果の持続について検討した研究では、夫に関する立ち会い分娩の参加の有無と夫婦間親密性は関与しないと述べている。しかし、立ち会い分娩を行おうと考えた半数近くの夫が「妻と共に赤ちゃんの誕生を迎えたい」と感じており、家族が増える瞬間を夫婦で迎える体験を行おうとしていたともある⁴⁾。こうした研究から、夫の立ち会いについてその後生活に大きな影響を及ぼさないとはいえるが、妊婦としての妻側は出産を、「人生で一番感動すること」と捉えており、夫側も新たな生命の誕生という家族にとっての出来事を、子どもと何らか共有したいとするニーズが、選択の余地なく障害されていることへの思いがあると推察される。一人で出産することに対しては、自らが「産む」という実感の体験に喜ぶ語りもあり、妊婦としての出産に対する意識の高揚に影響していると考えられた。

VI 結論

コロナ禍の妊娠、出産、育児への影響として、以下が指摘できた。

1. 「協力関係」「欲しいサポート」「出産」に特徴が示された。
2. 「協力関係」では協力を依頼したいけれど依頼しづらいというアンビバレントな実態がある。
3. 「欲しいサポート」では、三密回避や感染対策など、子ども連れの生活や行動では、種々の調整が必要とされるため、妊娠・出産・育児と変化する過程を通じた全般的なサポートを要求する。
4. 「出産」では、家族にとってのイベントの共有欲求の障害と妊婦としての出産に対する意識の高揚に影響する。

本調査は、事前調査として5名の対象者からの聞き取りを行った。対象者は全て、コロナ禍前後での妊娠・出産・育児経験を有する対象からの聞き取りの結果であるため、ある程度の信頼は確保できると考える

が、より多くの対象者からの結果を加え、本調査からの知見を深める好機に恵まれることが必要である。

謝辞

本研究の実施にあたり貴重なお時間を割いてインタビューにご協力いただいた皆様、調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究の立案、調査、実施、データ解析ならびに論文執筆について、加茂、杉野、正司は同等に貢献した。

引用・参考文献

- 1) 松島みどり. 調査から見えてきた産後の抑うつリスク—妊娠期・産褥期の母親の精神的健康状態に関する調査から. 助産師雑誌, 75, (4), 242-249, 2021.
- 2) 武田文, 宮地文子, 野咲貞彦. 母親学級の受講とソーシャルサポートに関する研究. 日本健康体育学科誌, 第4巻, 第1号, 3-10, 1997.
- 3) 遠藤恵子他「「夫立ち会い分娩」に関する研究の動向—1990年代の国内の看護研究から—」山形保健医療研究, 第4号, 1-9, 2001.
- 4) 政岡永佳他「夫に関する立ち会い分娩の効果と現状の把握—夫婦間親密性尺度を利用し—」高知大学看護学会誌 Vol.12, No.1, 49-57, 2018
- 5) 古川亮子, 西野友子. 里帰り分娩終了後の産後サポート源の実態. 小児保健研究, 79 (4), 363-370, 2020.

表1 対象者の基本属性

No.	A	B	C	D	E
面接日	9月5日	9月12日	9月18日	9月26日	9月29日
年齢	30歳代	30歳代	30歳代	30歳代	30歳代
職業有無	有	無	無	有	有
職業	事務職 1年育児休暇予定	看護師をしていたが退職	看護師をしていたが1人目を出産して退職	公務員 税務署職員	看護師
出産回数	2回	2回	3回	3回	3回
今回出産時期	2020年11月	2020年9月	2020年9月	2020年5月	2021年3月
前回出産時期	①2018年	①2018年9月	①2016年12月	①2016年12月	①2015年4月
			②2019年3月	②2018年10月 保育園に入れず 育児休暇からそのまま産休・育休となっている	②2017年2月
同居者	夫と子ども2人	夫と子ども2人	夫と子ども3人	夫と子ども3人	夫と子ども3人
夫の職業	公務員（自衛隊） 在宅勤務なし 仕事帰りに保育園迎えと買物	理学療法士 時間外せずに帰宅在宅勤務なし	会社員 勤務時間： 9:30～20:00 在宅勤務なし	公務員（税務署職員） 出産前1～2回/ 週在宅勤務 8月～10月 育児休暇	会社員（造船） 在宅勤務なし
夫以外で近くで助けてくれる人の有無	無	有	有	有	有
近くで助けてくれる人	夫、友人が数名	夫、実家の両親	夫、実母	夫、実母	夫、実母
里帰りの有無	無	有	無	有	無
里帰りの場所	実母に自宅へ来てもらう予定にしていたがコロナで来れず	実家	上の子供の幼稚園もあったので自宅に実母が来てくれた	実家	必要な時、自宅に実母が来てくれ、掃除や食事など作ってくれた
里帰りの期間		1か月		2週間	
実家	鹿児島 夫実家：福岡	山口市内 夫実家：市内・車で10分	実家まで5分 夫実家：神戸	実家まで車で10～15分、助けてもらいたい時に助けてくれる	実家は車で30分程度 夫実家：長崎
居住地域	山口市	山口市	山口市	山口市	東広島市

表2 対象者の語りの基本情報

対象者	総抽出語数（使用した数）		異なり語数（使用した数）		文の数	段落の数
A	2125	(283)	424	(283)	93	77
B	1466	(542)	370	(257)	97	73
C	2564	(910)	521	(366)	138	88
D	3329	(1088)	607	(425)	125	91
E	3219	(1116)	555	(396)	162	83
A～E（5名）	12800	(4348)	1317	(1022)	619	413

表3 各対象者の各調査項目に対する主な語り

質問項目	主な語り
妊娠	<p>病院等でキッズルームがなく困った (Aさん) 家族(夫)は外来にも入れなかった (B・Dさん) 母親学級、マタニティ講座が中止になり参加できなかった。(A・Bさん) 面会がなく、自分だけの時間でよく眠れた (Bさん) 集団での教室がなかったが、助産師さんに個別に相談することができてありがたかった(A・C・Dさん) マスクをすると息苦しかった (C・Eさん) 家族に感染対策を厳しくいって辛かった (Cさん) 子どもたちの精神状態を考えてあげられなかった (Dさん) いろいろなところへ行けなかった (旅行、観光) (Eさん)</p>
出産	<p>感染予防の為入院施設の説明と見学が行われず、不安だった。(A・Eさん) 立ち合い分娩ができず主人は残念がっていた (Aさん) 旦那さんが赤ちゃんを抱けない、窓越しに見せるなど申し訳ない (Bさん) 入院中、家族に全くあえなかったので、心配で早く退院したかった (Cさん) 主人と赤ちゃんの関わりが薄い、薄すぎる (Cさん) 写真を送ったりビデオ通話をした。(B・Cさん) 県外の両親にすぐに会えない (A・Eさん) 立ち合いが叶わず、やる気になり「産んでいる」という実感がもてた (Dさん) 出産という人生で一番感動することを一緒に共有したかった (Eさん) 陣痛が痛い時にさすってもらえず寂しかった (Eさん)</p>
育児	<p>県外に出ると2週間ルールがあり、小児科受診できるか心配だった (Aさん) 公園も閉鎖で遊ばせるところがなかった (B・Dさん) 支援センターや遊べる施設に行きづらかった (A・C・Dさん) 散歩、ドライブや実家に行き過ぎた (Cさん) 家の中でできること、家事や料理を一緒にした (C・Eさん) 同世代の母親には公園に行った時に会うことができた (Aさん) 友達と遊ぶのと親と遊ぶのとは違う (Bさん) (在宅勤務から) パパとの時間が多くなった (Cさん) 保育園は自主登園になり、周りの目があり保育園に行かせづらかった (Dさん) 休園で家にいる子供達を遊ばせたいのに、妊娠後期で体が動かせずストレスと葛藤があった (Dさん) (子どもに) 感染対策を口うるさく言う (Dさん) 人が多いと怖いから行きたいところにいけないのがストレス。リフレッシュできない (Eさん)</p>
協力関係	<p>県外の両親も来づらい。同市内でも両親と行き来しづらい (A・B・Dさん) 主人が在宅勤務の期間は家のことを手伝ってくれた (Dさん) 家族が顔を合わせるが多くなりストレスフルになった (Dさん) 他人と行き来がなくなったら、主人にしか助けを求められないのに、気持ちを察してくれない(Dさん) 夫や親に家事全般を助けてもらう (Eさん) 送迎・家事・買い物は主人がしてくれて助かった (Aさん) 感染予防のため、家族以外に新しいつながりを増やそうと思わない (Dさん)</p>
欲しいサポート	<p>コロナに感染したときの相談窓口、相談サイトを教えて欲しかった (Bさん) 健診時に子ども(兄弟)を預かってくれる場所が欲しい (Aさん) 保健センター利用にも予約が必要で煩わしい (Bさん) 手続き関係をデジタルまたはオンライン化へ進めてほしい (Cさん) 各家庭専属のファミリーサポートが欲しい (Eさん) 公園を増やして欲しい (Cさん)</p>

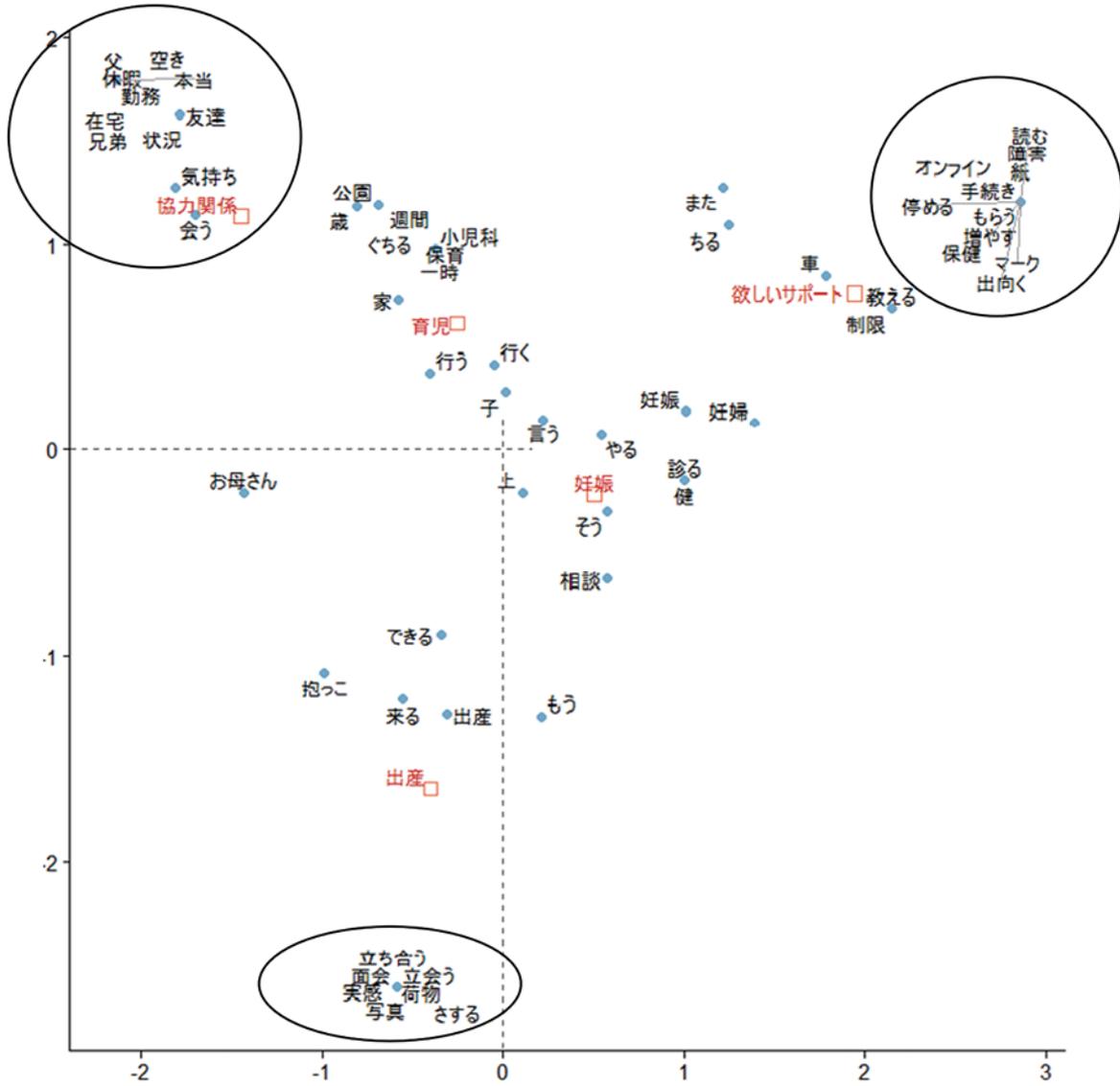


図1 「対象者の語り」と「調査項目」との対応分析